

# 「自然」の声を聴け

## —英米文学における“Nature”をめぐって—

### (5)

村田和穂

〈令和6年1月9日受理〉

### Listen to the Voice of “Nature”

—With Special Reference to “Nature” in English Language Literary Works—  
Paper Five

MURATA Kazuho

The fifth essay on “Nature” is concerned with “the Chain of Being,” a hierarchical classification system of the divine order of the universe, based upon Ancient Greek philosophies, subsequently adapted and widely employed by European Christianity. It was dominant and integral in western societies’ ideologies, rules and norms until the late eighteenth century. The specific approach in this essay is drawn from a close reading of two essays (Nos. 111 and 519) in *The Spectator* (1711-12, 1714), a periodical published by Addison and Steele in early eighteenth-century London. The present study aims to observe through the use of the words “Nature” and “Being” how Addison, the author of the two essays, explains the concept of “the Chain of Being” for his readers.

To whom the patriarch of mankind replied,  
O favourable spirit, propitious guest,  
Well hast thou taught the way that might direct  
Our knowledge, and the scale of nature set  
From centre to circumference, whereon  
In contemplation of created things  
By steps we may ascend to God.

(Milton *Paradise Lost* Book V, 506-12)

(彼に対して人類の始祖は答えた、  
ああ、親切な精霊、好意的な客人よ  
あなたは我々の知識を導く道と、創造された事物を考慮しながら  
一歩ずつ我々が神の御許に登っていくことのできる  
中心から周辺まで連なる自然の梯子 (階段) を巧みに教えて下さった。) <sup>1</sup>  
(ミルトン『失樂園』5巻 506-12行)

#### I はじめに

今回は、エピグラフに挙げた17世紀を代表する詩人ミルトン (John Milton 1608-1674) による叙事詩『失樂園』(1667) の不思議な一節から始めたい。

これは人類の始祖であるアダムが大天使ラファエルと対話する場面からの引用である。下線部の“scale of nature” (自然の梯子・階段) とは、詩人の想像力から生み出された表現ではなく、18世紀後半までの

<sup>1</sup> 引用箇所における太字および下線はすべて筆者による (ただしイタリック体は原文のまま)。また引用英文につけた日本語訳は全て筆者によるものである。

西洋の知的土壌に深く浸透していた観念または思想を表す慣用句なのである。『オックスフォード英語辞典 (*The Oxford English Dictionary*, online edition)』

(以下OED)はこのコンテキストの“scale”に“A succession or series of steps or degrees; ... esp. a graduated series of beings extending from the lowest forms of existence to the highest (**scale of being(s)**, **scale of creatures**, **scale of existence**, **scale of life**, **scale of nature**, etc.).” (OED s.v. scale, n.<sup>3</sup> 5a. 1605-) (一連の梯子もしくは階段; 特に、最も低い実存の形態から最も高い形態まで伸びる等級順の配列)の語義を与え、いくつかの成句(太字箇所)を記載している。「自然の梯子」以外にも「存在の梯子」、「創造物の梯子」、「実在の梯子」、「生命の梯子」というフレーズが同時に使用されていたようで、例えば、下線を引いた「存在の梯子 (scale of being(s))」は「自然の梯子」と同義と見做してよいのだろうか。

ところで、1933年に出版されたラヴジョイ (Arthur O. Lovejoy 1873-1963) の古典的名著 *The Great Chain of Being* (翻訳『存在の大なる連鎖』(ちくま学芸文庫)あり)には、「存在の鎖 (chain of being)」という(「存在の梯子」に似た)句が古代ギリシア哲学者プラトンを淵源とする歴史的背景の中で詳細に考察されている。OEDはこの句を以下のように定義している:

“**chain of being(s)**, (a conception of the universe as) a continuous series or gradation of types of being in order of perfection, stretching from God as the infinite down through a hierarchy of finite beings to nothingness; **the scale of being or nature**” (OED s.v. chain, n. 4a. 1651-) (存在の鎖、完成度の順に、無限者としての神から始まり有限の存在の階級を通して無に至る、存在の種類(型)の連続性もしくは順列(としての宇宙の概念); 存在または自然の梯子)

この定義の下線部に注目すれば、「存在の梯子」あるいは「自然の梯子」は「存在の鎖」と同義(少なくとも言い換え表現)と見做すことができるだろう。さらに、この表記だと「存在の梯子」と「自然の梯子」も(ほぼ)同義と考えてよさそうである。ラヴ

ジョイによると「中世を通じ18世紀後半に至るまで、多くの哲学者、ほとんどの科学者や、実際に、ほとんどの教育を受けた人々が疑問を持たず受け入れることができたのは—「存在の偉大なる鎖」としての宇宙の概念であった (through the Middle Ages and down to the late eighteenth century, many philosophers, most men of science, and indeed, most educated men, were to accept without question—the conception of the universe as a “Great Chain of Being.”) (p. 59) という。

最初に断っておくが、「宇宙の概念」という遠大なテーマは筆者の手に負える問題ではない。この連載してきた論考では常に“Nature”をキー・ワードとして、多種多様な文脈の中でこの語が具体的に何を意味するのかを考えてきたに過ぎない。では、何故ラヴジョイを取り上げたのかといえば、彼のこの著作に多大な影響を与えた文献(の一つ)に『スペクテイター (*The Spectator*)』(1711-12, 1714)が挙げられているからである。『スペクテイター (*The Spectator*)』はアディソン (Joseph Addison 1672-1719) とスティール (Richard Steele 1672-1729) によって18世紀初頭のロンドンで、ある期間ほぼ毎日刊行されていたジャーナル(定期刊行物)である。18世紀英文学を専門とする筆者は学生の頃より『スペクテイター』に親しんできた。<sup>2</sup> 合計で635号まで続いたナンバー(毎号平均4ページ程のエッセイ)の中で興味深い号、とりわけ“Cheerfulness”(心の快活さ)の重要性を説く381号及び387号、は今も折に触れて読み返している。ラヴジョイが自著で数回言及している具体的なナンバーは519号(1712年10月25日発行)だが、111号(1711年7月7日発行)にも一度だけ触れている。ちなみに執筆者はどちらの号もアディソンである。今回の論考では『スペクテイター』の111号と519号で使用される“Nature”に焦点を当てながら、西洋思想の真髄「存在の鎖」並びに「存在の梯子」についての考察を試みる。

## II 『スペクテイター』111号における「自然」<sup>3</sup>

まず、第111号の“Nature”と“Being”という語に着目して丁寧に読み返してみたい。この号の主題は

<sup>2</sup> 筆者の学生時代の指導教授であった故・伊藤弘之博士は『スペクテイター』を長きに亘り研究対象とし、1980年に *The Language of The Spectator* (単著)を上梓している。この書は、筆者がスウィフトの『ガリヴァー旅行記』についての修士論文を執筆する際の重要な参考文献であった。また、夏目漱石著『文学評論』(岩波文庫)は漱石の東京大学での18世紀英文学についての講義を纏めたもので、その第3編が「ア

ディソン及びスティールと常識文学」となっており、『スペクテイター』のいくつかの号が詳細に紹介されている。これも当時繰り返し読んだものである。

<sup>3</sup> 『スペクテイター』111号のテキストは Donald F. Bond によって編集された *The Spectator*, Volume I (1987 [1965]) を用いている。

アディソンが常々思いを巡らせていたという「靈魂の不滅 (the Immortality of the Soul)」についてである。彼はそれを強く信じているのだが、その根拠として三点の私見を提示するが、最初に「靈魂 (Soul)」の“Nature” が述べられる：

the Nature of the Soul it self, and particularly its Immateriality; which tho' not absolutely necessary to the Eternity of its Duration, has, I think, been evinced to almost a Demonstration. (pp. 456-7) (靈魂自体の自然と、特にその非物質性、それは、決して靈魂持続の永遠性に絶対に必要というわけではないが、ほとんど決定的に明示されてきたと私は考えている)

次に「情熱と心情 (Passions and Sentiments)」(p. 457) が言及される。具体的には、「実存の愛 (its Love of Existence)」と「靈魂消滅の恐怖 (its Horror of Annihilation)」を指し、これらが魂の不滅の証明に繋がるという。最後に、至高の存在としての「神 (God)」の“Nature” が示される：

Nature of the Supreme Being, whose Justice, Goodness, Wisdom and Veracity are all concerned in this great Point. (p. 457) (至高の存在の自然、その正義、善、叡智、真実性は全てこの大事な点 [注：靈魂不滅] に関わっている)

上に挙げた“Nature” (2例) の訳語は統一を図るために敢えて「自然」としたが、「性質」(あるいは「本質」)とした方がわかりやすいだろう。ところで、アディソンが根拠とする上記の意見は一般の読者(特に日本語を母語にする読者)には独断的に思われるかもしれないが、これも西洋の伝統に基づく見解であることを念頭に置くべきである。加えて、アディソンは「靈魂の不滅」についての卓越した意見の一つとして「靈魂の完全な状態への、決してそこにたどり着く見込みはないものの、絶え間のない向上進化 (the perpetual Progress of the Soul to its Perfection, without a Probability of ever arriving at it)」(p.457) に触れながら、このような「靈魂が(中略)ほとんど創り出された途端に無に帰してしまうなんてことがどうして人間の考えに及ぶことが可能だろうか (How can it enter into the Thoughts of Man, that the Soul, ... shall fall away into nothing almost as soon as it is created?)」(p. 457) と疑問を呈している。

アディソンは「動物は短い生命のうち自らの仕事を全うできる (Animals ... can finish their Business in short Life)」(p. 458) として、「蚕は糸を紡いだ後、卵を産み、そして死ぬ (Silk-worm, after having spun her Task, lays her Eggs and dies)」(p. 458) と “Silk-

worm” (蚕) の例を挙げながら、それに比べて人間の一生はいかに不完全かを訴える：

A Man can never have taken in his full measure of Knowledge, has not time to subdue his Passions, establish his Soul in Virtue, and come up to the Perfection of his Nature, before he is hurried off the Stage. Would an infinitely wise Being make such glorious Creatures for so mean a Purpose? Can he delight in the Production of such abortive Intelligence, such short-lived reasonable Beings? (p. 458) (人間は人生という舞台を急いで退場するまでに十分な知識を取り込む(理解する)ことは決してできないし、煩悩を抑制するにも、魂を美徳の中で確立するにも、自らの自然の完成に到達するにも時間がないのだ。無限に賢明な存在 (=「神」) がこれほど意地悪な目的でこのような栄光に満ちた生物を創り出すだろうか? 彼はこのような未熟な知性、このような短命な理性的存在 (=人間) の生産に喜ぶことができるのか?)

まず、下線部の例 “an infinitely wise Being” (無限に賢明な存在) と “short-lived reasonable Beings” (短命な理性的存在) が示すように、ここでも “Being” という語を通して、「神」と「人間」が対比的に描き分けられている。アディソンは、人間は短い生涯で「自らの自然 (his Nature)」、即ち「性質、本性」の完成に達する時間はない、と認めているが、次の段落では、靈魂の「自然」に言及する：

There is not, in my Opinion, a more pleasing and triumphant Consideration in Religion than this of the perpetual Progress which the Soul makes towards the Perfection of its Nature, without ever arriving at a Period in it. (p. 458) (私見では靈魂がその自然の完成に向けて、終点に到達することは決してないにもかかわらず、絶えず向上するという考察よりも愉快で立派なものは信仰においては他にないのです)

「人間の自然」は肉体を伴った「自然」のことだが、ここでの「靈魂の自然」は「肉体」から切り離された、即ち、死後の「自然」のことなので、誰にも判断できないことから、ここから先は “Religion” (信仰) の問題になってくる。「信仰」あるいは「宗教」の本来の存在意義は、死を見据えることで「現在」の自分を顧みて、より良く生きることを説くことある。アディソンも以下の言説で同様のことを考察している：

Methinks this single Consideration, of the Progress of a finite Spirit to Perfection, will be sufficient to extinguish all Envy in inferior Natures, and all

Contempt in superior. (p. 459) (私が思うに、一個の有限な精神の完成への向上という一念はより劣った自然におけるあらゆる妬みとより優れた(自然)におけるあらゆる軽蔑心を消し去るのに十分であるだろう)

最初の下線部 “a finite Spirit” の和訳をとりあえず「一個の有限な精神」としたが、“Spirit” と “Soul” は基本的に同義であるので、ここも「靈魂」としても良いのかもしれない。ただし、[finite + Spirit] というコロケーションには違和感を覚える。この号の主題は「靈魂の不滅 (immortality of Soul)」、即ち [infinite + Soul] (無限な + 靈魂) についてだからだ。当然、“Spirit” も「無限」のはずである。このように考えていくと、アディソンがこのコンテキストで “Spirit” を用いる意図は、死後ではなく、現在生きている人間の魂、即ち、肉体に閉じ込められている期間 (そう！期間限定) の靈魂のことを、“Soul” と区別して、“Spirit” と呼んでいるように筆者には思われる。加えて、「より劣った自然」と「より優れた (自然)」における “Natures” は明らかに「人間性」のようなものを指しているもので、突き詰めると、ここでの “Natures” を「個々の人間」と解釈すると腑に落ちる。このことから、アディソンは『スペクテイター』の読者に「現在を大切に生き、寛容な心を持つこと」を説いているようだ。

111号の最後の “Nature” の用例 (2例) は、上記の引用箇所が続いて、神の使いとして天使、正確には “Cherubim” (智天使ケルビム)、が人間の靈魂に現れるというコンテキストの中で観察される。ここで初めてアディソンは「存在の梯子」に言及する：

It is true, the higher Nature still advances, and by that means preserves his Distance and Superiority in the scale of Being; but he knows how high soever the Station is of which he stands possess'd at present, the inferior Nature will at length mount up to it, and shine forth in the same Degree of Glory. (p. 459) (より高次の自然がなおも前進し、それにより存在の梯子における彼の距離と優位性を維持するのは真である、しかし、彼の立つ位置が現在どんなに高かろうと、それよりも下位の (劣った) 自然がその位置までついに登りつめ、それと同じ程度の栄光の中で輝きを放つことになるのも彼は知っているのだ)

最初の下線部 “the higher Nature” (より高次の [上位に位置する] 自然) とは、以前にも考察したように

「超自然の (supernatural) 事象を指すことから、<sup>4</sup> ここでは明らかに先述したケルビムのような「天使」を指すと考えられる。それにより、“the inferior Nature” (それよりも下位に位置する [劣った] 自然) が「人間」を指すのは当然の帰結である。「存在の梯子」の最上段の方は天使の居場所なのだが、人間も精進次第でこの位置まで達することが可能であると、アディソンは信じていたようだ。

### III 『スペクテイター』519号における「自然」<sup>5</sup>

アディソンは111号の発行から1年3ヶ月ほど経った1712年の10月25日の519号で、再び「存在の梯子」を取り上げる。ここでも、“Nature” と “Being” に注目して読んでみたい。“Nature” の最初の用例は冒頭に出てくる：

THOUGH there is a great deal of Pleasure in contemplating the Material World, by which I mean that System of Bodies into which Nature has so curiously wrought the Mass of dead Matter, with the several Relations which those Bodies bear to one another; there is still, methinks, something more wonderful and surprizing in Contemplations on the World of Life, by which I mean all those Animals with which every Part of the Universe is furnished. (p. 345)

(物質世界を注意深く観察するのは大いなる喜びであるのだが、その世界とは自然が大量の無機物を捏(こ)ねて実に巧妙に作り上げた有形物の体系を意味し、それら形ある物は互いに幾つにも関連している。しかしながら、私が思うに、生命の世界、即ち、この世界の隅々にまで備えられているあらゆる動物のことを意味するが、その世界の観察においては一層不可思議で驚嘆すべきものがある)

ここでの “Nature” は明らかに「造化、創造主」を意味する。また、下線を引いた “dead Matter” (生命のない物質、無機物) と “Life” (命) の対比が見られるように、生物・無生物の観点から物質世界を俯瞰しつつ、動物の世界の方が驚異に満ちていると述べる。アディソンの見解にはこの時代の科学の発達が根本にあり、「一人の人間、あるいは他のいかなる動物の体にも、我々の顕微鏡で発見できない生物が無数にいて、動物達の表面もまた他の動物で覆われており、その動物達も同じように、それらに寄生する他の動物達の本拠なのである (the Body of a Man,

<sup>4</sup> 拙論「「自然」の声を聴け (1) 序」p. 8 及び脚注 17 参照。

<sup>5</sup> 『スペクテイター』519号のテキストは Donald F. Bond によ

って編集された *The Spectator*, Volume IV (1987 [1965]) を用いている。

or of any other Animal, in which our Glasses<sup>6</sup> do not discover Myriads of living Creatures. The Surface of Animals is also covered with other Animals, which are in the same manner the Basis of other Animals that live upon it;」(p. 346) と述べた後、彼は小さな世界からより大きな世界に目を向ける：

if we look into the more bulky Parts of Nature, we see the Seas, Lakes and Rivers teeming with numberless Kinds of living Creatures: (p. 346) (我々が自然のもっと巨大な部分を調べてみるなら、海や湖や川にも無数の種類の生物で溢れているのがわかる)

このコンテキストの“Nature”は生み出す「自然」ではなく、生み出された「自然」、即ち「自然界、大自然」という意味合いを強く帯びる。アディソンは新たな段落で「実存は知覚を受けられた存在のみへの祝福である (Existence is a Blessing to those Beings only which are endowed with Perception,)」(p. 346) と哲学的命題を提示するが、“Existence” (実存) は有形であり、<sup>7</sup> “Being” (存在) は有形だけでなく無形も包括すると区別することは、次の難解なパラグラフを読み解くヒントになるかもしれない：

Infinite Goodness is of so communicative a Nature, that it seems to delight in the conferring of Existence upon every degree of Perceptive Being. As this is a Speculation, which I have often pursued with great Pleasure to my self, I shall enlarge farther upon it, by considering that Part of the Scale of Beings, which comes within our Knowledge. (p. 347) (無限の善とは非常に伝播する自然のものなので、それ[無限の善]はあらゆる種類の知覚を持った存在に実存を授けることを喜ぶようだ。以上のことは一つの思索であり、これを私自身大きな喜びを持って度々追求してきたのだから、私たちが知るところとなった存在の梯子のその部分を考察することで、さらに詳しく述べてみたい)

最初の一文はそれでもわかりにくい、下線部の「無限の善」はそもそも「神」の属性を指すので、<sup>8</sup> 従属節 (*that*節) の“it”は「神」と解釈した方が意味が通るかもしれない。続く下線部の“of ... a Nature”は「・・・な性質のもの」と読み換えることができよう。また、この言説は「存在の梯子」についてのアディソンの理解の一部であることが確認できる。

次の段落から、アディソンは「存在の梯子」における「いくつかの生命のある創造物 (some living Creatures)」(p.347) の階層(階級)に触れながら、「無機物のわずか上位に引き揚げられた (raised but just above dead Matter)」とする「貝殻を有する軟体動物の種 (that Species of Shell-fish)」(p.347) を最初の例に取り、続けて「このような動物と紙一重の差しかない他の多くの生物がいて、それらは触覚と味覚以外の感覚を持たない (There are many other Creatures but one Remove from these, which have no other Sense beside that of Feeling and Taste)」(p.347) と述べていく。さらに、この二つの感覚に、さらに聴覚が加わった他の生物、味覚が加わった他の生物、視覚が加わった他の生物もいることに言及した後、「生命の世界が、全ての感覚の完成された生物が形成されるまで、多種多様な種を通して、なんと緩やかな進行で前進するのを観察するのは驚くべきことだ (It is wonderful to observe, by what a gradual Progress the World of Life advances through a prodigious Variety of Species, before a Creature is formed that is compleat in all its Senses,)」(p.347) と感嘆しつつ、以下の文でこの段落を締めめる：

This Progress in Nature is so very gradual, that the most perfect of an inferior Species comes very near to the most imperfect, of that which is immediately above it. (p. 347) (自然におけるこの進行は非常に緩やかなため、より劣った種の最も完成されたものはその真上の位置の種の最も不完全なものに近接することになる) ここでの“Nature”もやはり「生み出された自然」即ち「自然界」のことである。それにしても、「(生命の世界が) ゆるやかな進行で前進する」というアディソンの言説は筆者に「進化論 (evolution theory)」を連想させる。ラヴジョイは「〈自然〉という語を除けば、〈存在の偉大な鎖〉は18世紀の神聖な(尊ばれた)句であり、19世紀後半の〈進化〉という喜ばしい語と幾分類似した役割を果たしている (Next to the word ‘Nature,’ ‘the great Chain of Being’ was the sacred phrase of the eighteenth century, playing a part somewhat analogous to that of the blessed word ‘evolution in the late nineteenth)」(p. 184) と述べているように、「存在の鎖」と「進化」の関係性が指摘されている

<sup>6</sup> OED が “glass(es)” に “a microscope” (顕微鏡) の意味を認めた最初の用例は 1647 年の文献からである (OED s.v. glass, n.<sup>1</sup> 10c. 1647-).

<sup>7</sup> OED は “existence” に “The fact, state, or property of existing or having objective reality” (実在している即ち客観的な現実性

(実態) を持っている事実、状態、もしくは特性) という語義 (OED s.v. existence, 1a. a1425-) を与えている。

<sup>8</sup> 現に、前セクションで扱った 111 号で、アディソンは「神」への言及で “his infinite Goodness, Wisdom and Power” (彼の無限の善、叡智と力) (p. 457) と記述している。

のは興味深い。

次の段落では、「存在の鎖」においては動物の下位に置かれる植物との比較が出てくるが、“Nature”が使用されるのは以下の言説である：

The whole Chasm in Nature, from a Plant to a Man, is filled up with diverse Kinds of Creatures, rising one over another, by such a gentle and easie Ascent, that the little Transitions and Deviations from one Species to another, are almost insensible. (p. 348)

(自然における植物から人間までの完全に深い溝は、非常に緩やかで平坦な勾配により一つずつ上昇していく多種多様な創造物で埋められているので、一つの種から別の種までのわずかな推移と逸脱がほとんど感知されない程である)

植物から人間までの「深い溝 (Chasm)」は「自然界」の目に見える物質的な世界の比較論だが、人間から神への「溝」は目に見えない非物質的な「超自然の (supernatural)」領域になってくる：

If the Scale of Being rises by such a regular Progress, so high as Man, we may by a Parity of Reason suppose that it still proceeds gradually through those Beings which are of a Superior Nature to him, since there is an infinitely greater Space and Room for different Degrees of Perfection, between the Supreme Being and Man, than between Man and the most despicable Insect. (p. 348) (仮に存在の梯子がこのような規則正しい前進で、人間の高さまで上昇するのであれば、私たちは類推によってその梯子は人間より優れた自然である例の存在を通して依然として徐々に進行すると仮定することができる。というのも、至高の存在と人間の間には、人間と最も卑しむべき虫の間よりも、完成度の違いで言えば無限なくらいに広大な隙間があるからだ)

神と人間の「隙間 (Space and Room)」と人間と昆虫のそれとの比較に関しては、アディソン自身の思いつきではなく、イギリスの18世紀の思想に多大な影響をおぼした哲学者ロック (John Locke 1632-1704) の言説に着想を得たことを、彼ははっきりと記している。そして、ロックの主著である *An Essay Concerning Human Understanding* 『人間悟性論』(1690) の3巻6章12節をそのまま引用するのだが、その直前にアディソン自身の興味深い解説が入るのでこれも参考までに挙げておきたい：

notwithstanding there is such infinite room between Man and his Maker for the Creative Power to exert it self in, it is impossible that it should be filled up, since there will be still an infinite Gap or Distance between

the highest created Being, and the Power which produced him. (p. 348) (人間とその創造主の間にはそれを行使する創造の力により無限の隙間があるにも関わらず、その隙間が埋められるなんてことは不可能である、というのも創造された中で最も高い次元の存在と彼[人間]を生み出した力の間には無限の溝あるいは距離が今後もあり続くであろうから)

まず平易な表現で人間と創造主としての神を比較した後に、独特な言い換えが行われている。即ち、下線部の“the highest created Being” (創造された中で最も高い次元の存在) とは「人間」のことを指す。従って、人間より上位に位置すると考えられる「存在」、即ち、天使のような存在は、全て被造物ではないことがわかる。また、「神」が“the Power which produced him” (彼を生み出した力) と「力」そのものに言い換えられているのは非常に示唆的である。

ロックからの引用文の後に、結論ともいべき最後の段落が続くが、それを全文引用する：

In this System of Being, there is no Creature so wonderful in its Nature, and which so much deserves our particular Attention, as Man, who fills up the middle Space between the Animal and Intellectual Nature, the visible and invisible World, and is that Link in the Chain of Beings which has been often termed the *nexus utriusque mundi*. So that he, who in one Respect is associated with Angels and Arch-Angels, may look upon a Being of infinite Perfection as his Father, and the highest Order of Sprits as his Brethren, may in another Respect say to Corruption, *thou art my Father, and to the Worm, thou art my Mother and my Sister.* (p. 349) (存在のこの体系においては、人間ほど、その自然において驚嘆すべき被造物はなく、そのことは私たちの注目に大いに値するものだが、人間は動物的と知性的自然、即ち、可視と不可視の世界の中間を埋めるものであり、しばしばラテン語で〈二つの世界を繋ぐもの〉と称されてきた存在の鎖のその繋ぎ目でもあるのだ。それ故に、人間は、ある点では、天使や大天使を連想させるところがあり、無限で完全な存在を父と、そして最高位の精霊たちを兄弟と見做すこともできれば、また、別の点では、〈腐敗に向かって汝は我が父、蛆虫に向かって汝は我が母で姉妹〉、と言うこともできるのである)

非常に興味深い締め括りの文章である。まず前半の下線部の“the Animal and Intellectual Nature” (動物[肉体]的と知性[精神]的自然) には説明があるだろう。このコンテキストにおける“intellectual”の意味

を正確に掴むには、*OED*の語義 “Apprehended or apprehensible only by the intellect or mind (as opposed to by the senses), non-material, spiritual” (知力または精神によってのみ把握されたまたは把握できる (感覚によってとは対照的に) ; 非物質な、霊的 [精神的] な) (*OED* s.v. intellectual, adj. 1. *Obsolete. a1398-1715*) を参照しなければならない(この語義は現在では「廃れた (obsolete)」とされている)。また、「動物的自然 (界)」と「知性的自然 (界)」は「可視世界」と「不可視世界」に適切に言い換えられている。「その繋ぎ目 (that Link)」の役割を担っているのが人間なのである。また後半の “a Being of infinite Perfection” (無限で完全な存在) は言うまでもなく「神」のことを指し、最後のイタリック体の箇所は旧約聖書の「ヨブ記」の17章14節、〈死〉の描写からの引用である。このように見ていくと、二つの世界の繋ぎ目として存在する人間は死によって肉体は下位の世界へ、同時にその靈魂は上位の世界に向かうことを、アディソンは『スペクテイター』の読者に熱心に解説しているのだ。

#### IV おわりに：宮沢賢治の「新たな自然」

以上、前回までと同様に “Nature” という語に注意を払いながら、今回は18世紀の定期刊行物『スペクテイター』111号と519号の精読を通して、18世紀までの西洋の思想に多大な影響を及ぼした「存在の梯子」もしくは「存在の鎖」を考察した。「梯子」にせよ「鎖」にせよ、“being” (存在、在るもの) という語自体にこのような歴史的背景および重層的意味があるために、「人間・ヒト」が “human being” (人間の存在) あるいは「神 (God)」が “the Supreme Being” (至高の存在) と称されていることに合点が行く。また、111号の考察で引用した “the perpetual Progress of the Soul to its Perfection, without a Probability of ever arriving at it” (靈魂の完成 [完璧さ] への、決してそこにたどり着く見込みはないものの、絶え間のない向上) (p.457) という当時の知識人の中での共通認識を知るに至り、同時代の作家スウィフト (Jonathan Swift 1667-1745) が *Gulliver's Travels* (『ガリヴァー旅行記』) (1726) に登場させた「フイヌム (Houyhnhnm)」という理想的な動物 (実際は馬) の語源が「自然の完成 (Perfection of Nature)」であったこ

とを思い出した。<sup>9</sup> 神を頂点に、そこから降りながら順に天使、人間、動物、植物、鉱物等を配置していく不思議な「梯子 (または鎖)」。この明確なヒエラルキーの中で「完璧」なのは神のみ。それを百も承知のスウィフトが神の被造物の一つに過ぎない馬に対して “Perfection” と賛美すること自体が、「存在の梯子」という伝統的な観念に対する挑戦であり、冒瀆であり、そして痛烈な皮肉である。そのため、作品に込められた「風刺」の意図も一層明確になるのだ。

『スペクテイター』に話を戻すと、「存在の梯子」というヒエラルキーの説明で、“superior” (より上位にある、優れた) ならびに “inferior” (より下位にある、劣った) という形容詞が多用され、神の被造物の優劣が議論されることには少々辟易させられたことも正直に告白しておきたい。本文中で引用した519号の “there is an infinitely greater Space and Room for different Degrees of Perfection, between the Supreme Being and Man, than between Man and the most despicable Insect” (至高の存在と人間の間には、人間と最も卑しむべき虫の間よりも、完成度の違いで言えば無限なくらいに広大な隙間がある) の言説について考える際、筆者は「一寸の虫にも五分の魂」という日本語の慣用句を想起した。アディソンは神の偉大さを読者に実感させるために卑近な例に「虫」を取り上げたのだが、日本語には小さな虫に対しても何とも思いやりのある表現があるものだ。いや「虫」だけではなく、「植物」に対する我が国の人々の想いも格別なものがあつた。文学作品を例にとっても、室町時代の世阿弥が書いた能楽作品には植物の精霊が登場し、人間に反省を促す (例: 「西行桜」)。また、宮沢賢治も小動物に限らず植物をも擬人化して数々の童話を生み出した (例: 「若い木霊」)。<sup>10</sup> そんな宮沢賢治について以前から気になっていた「自然」に関する表現がある。それは「生徒諸君に寄せる」という題のメッセージにある。この作品は『宮沢賢治詩集』(新潮文庫)にも収められているので、「詩」に分類しても良いだろう。その詩には、以下のような一節がある：

(前略)

むしろ諸君よ 更にあらたな正しい時代をつくれ  
宙宇は絶えずわれらに依って変化する

<sup>9</sup> 拙論「自然」の声を聴け (1) 序 p.3 参照。

<sup>10</sup> このような背景には仏教の「草木国土悉皆成仏 (そうもくこくどしつかいじょうぶつ)」という教えがある。これは「草木や国土のような非情なものも仏性を具有し成仏する」とい

う意味である。「この思想はインドにはなく、6世紀頃、中国仏教のなかに見出されるが、特に日本で流行した」(『ブリタニカ国際大百科事典』より) という指摘は興味深い。

潮汐や風

あらゆる**自然**の力を用ひ尽すことから一足進んで  
諸君は**新たな自然**を形成するのに努めねばならぬ  
(後略) (p. 285)

引用の4行目の「自然(の力)」の具体例が1行上の「潮汐や風」であることはわかる。それでは、下線部の「新たな自然」とは何であろうか。これは非常に難しい問いのようである。というのも、卓抜な宮沢賢治論『言葉の流星群』の著者で、賢治と彼の作品に深い愛情と理解を示してきた池澤夏樹ですら、この箇所を誤読しているように思われるからだ。池澤は次のように述べる：

(前略) その前提には あらゆる**自然**の力を用ひ尽す  
ことから一足進んで／諸君は**新たな自然**を形成するの  
に努めねばならぬ という**技術主義的な**考えがある。  
人間の足らぬ知恵で作った「新たな**自然**」がいかに貧相  
で、現在のわれわれに災厄をもたらしているか、(後略)  
(p. 154)

「新たな自然」は潮汐や風とは全く異なるものになるはずだが、少なくとも、池澤の言う「技術主義的な」自然ではない。筆者の解釈では、今回の考察における『スペクテイター』(519号)からの引用に即して言うならば、「新たな自然」とは“the Animal and Intellectual Nature”における後者、「知性的自然 (the Intellectual Nature)」のことである。これは、アディソン自身「不可視の世界 (the invisible World)」と言い換えているように、靈魂の領域、即ち、精神あるいは心の世界を指す。宮沢賢治は「新たな自然(の形成)」というフレーズの中に、生徒たちの「靈魂の向上進化」、わかりやすく言い換えれば、「精神あるいは心の鍛錬と成長」の願いを込めたのではないだろうか。実際、賢治の教えを受けた生徒(根子吉盛)の証言に次のようなものがある：

宮沢先生は、私たち生徒に、一次元から四次元までの話をしてくれたのですよ。一次元はただ真直に進むだけしかない世界。二次元は長さや幅のひろがりがある。三次元は縦、横、高さとなる。四次元は、もう人は飛ぶし、地下も走る、というようなことを話すのですね。(畑山博著『教師 宮沢賢治のしごと』p. 104)

そう、「人は飛ぶし、地下も走る」四次元の「自然」、即ち、形而上の「自然」こそが「新しい自然」になるはずだ。そうでなければ、この後に続く有名なフレーズ「新しい時代のコペルニクスよ／余りに重

苦しい重力の法則から／この銀河系統を解き放て」が意味的に繋がらないのではないか。また、さらに言い換えると、この連載エッセイで何度も繰り返して引用している鈴木大拙の名言“**I am in Nature and Nature is in me**”(自然の中に私がいて、私の中に自然がある)における、<sup>11</sup> 後半部分の「私の中の自然 (Nature in me)」、これが「新しい自然」である。生徒たちが、この「自然」の存在に気づき、これを大切に育むことを賢治は切に願っていたのだと筆者は信じたい。今回のアディソンのエッセイを精読したことで、宮沢賢治の「自然」にまで想いを馳せることになった。やはり、英語の“**Nature**”と日本語の「自然」は深い部分で緊密に繋がっている。(つづく)

## 引用文献

- Bond, Donald F. (1987 [1965]) *The Spectator*, Volumes I-V. Oxford: Clarendon Press.
- Lovejoy, Arthur O. (2001 [1936 and 1964]) *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*. Cambridge and London: Harvard University Press.
- Milton, John (2005 [1667]) *Paradise Lost* (with an Introduction by Philip Pullman). Oxford: Oxford University Press.
- 池澤夏樹 (2003)『言葉の流星群』角川書店(初版)。
- 畑山博 (1992)『教師 宮沢賢治のしごと』小学館ライブラリー(初版第1刷)。
- 宮沢賢治 (2018 [1991])『新編 宮沢賢治詩集(天沢退二郎編)』新潮文庫(50刷)。
- 村田和穂 (2020)「自然」の声を聴け—英米文学作品における“**Nature**”をめぐる—(1)序 『有明工業高等専門学校紀要』第55号, pp. 1-15.

<sup>11</sup> 拙論「「自然」の声を聴け(1)序」pp. 3-4 参照。鈴木大拙の言葉について、最初の「自然」は物質宇宙(可視世界)

のこと、後の「自然」は精神宇宙(不可視世界)のことを指す、と筆者は理解している。